

研究主題 特別な教育的支援の必要な児童への支援の在り方
— 通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングを通して —

つくばみらい市立谷原小学校（平成20年度） 教諭 倉持 貴子

研究の概要及び索引語

特別な教育的支援の必要な児童と周囲の児童が、安心して集団生活を送るためには、社会性や対人関係を身に付けることが大切である。本研究では、特別支援教育の視点からの支援を取り入れ、通常の学級の担任と連携を図り、通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングを通して、特別な教育的支援の必要な児童への支援の在り方を考察した。

索引語： 特別支援教育，通常の学級，特別支援学級，交流及び共同学習，
特別な教育的支援の必要な児童，ソーシャルスキルトレーニング

1 主題設定の理由

中央教育審議会の「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（平成17年12月）によると、「特殊学級を担当する教員については、当該学級に在籍する児童生徒への指導に加え、通常の学級に在籍する障害のある児童生徒に対する通級による指導と類似した支援やいわゆる『巡回による指導』を行ったり、通常の学級を担当する教員に対する相談支援を行ったりしている例もみられる」と示されている。特別な教育的支援の必要な児童への適切な指導及び必要な支援が効果的に行われるために、特別支援学級担任としての役割は重要である。

本校は、全校児童 148人（通常の学級 6，情緒障害特別支援学級 1）の小学校である。情緒障害特別支援学級は、平成19年度の設置で2年目を迎え、3人が在籍し、その他、1人が必要に応じて特別支援学級で指導を受けている。特別支援学級在籍の児童は、特別支援学級で学習するほか、通常の学級で交流及び共同学習をしている。特別支援学級在籍の児童は、特別支援学級で社会性や対人関係を学んで、通常の学級の活動に参加している。しかし、通常の学級での児童とのかかわりに困難を示すことが多い。さらに、通常の学級の中にも、友達とうまくかかわれない児童や、感情を強く表すために孤立しがちな児童等が在籍している。そこで、特別支援学級在籍の児童だけでなく、通常の学級で特別な教育的支援の必要な児童に対しても、社会性や対人関係を身に付けさせたいと考える。

特別な教育的支援の必要な児童と周囲の児童が、安心して集団生活を送るための具体的な支援の方法の一つとして、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れたいと考える。この支援は、朝の会や学習の導入時、道徳や学級活動の時間等、様々な場面での活用が容易である。したがって、通常の学級でも取り組みやすい支援の方法であると考えられる。

そこで、特別支援学級担任として、通常の学級の担任と連携を図り、通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングを通して、特別な教育的支援の必要な児童への支援の在り方を考察したいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングを通して、特別な教育的支援の必要な児童への支援の在り方について考察する。

3 研究の内容

(1) 基本的な考え方

① 特別な教育的支援の必要な児童について

文部科学省の「特別支援教育の推進について(通知)」(平成19年4月)(以下『通知』)において、「特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍するすべての学校において実施されるものである。」と示されている。つまり、特別支援学級在籍の児童だけでなく通常の学級で知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で困難さを示す児童も含め、特別な教育的支援の必要な児童ととらえた。

② 通常の学級における特別支援教育について

『通知』によると、「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。」と示されている。したがって、特別支援教育は、場が設定されているのではなく児童の教育的ニーズに応じて柔軟に行われるものであり、教育的ニーズのある児童に対し適切な教育的支援を行うことが、通常の学級における特別支援教育であるとしてとらえた。

③ ソーシャルスキルトレーニングについて

ソーシャルスキルとは、social skillsの訳語で「生活技能」「社会的技能」などと訳される。上野一彦氏・岡田智氏は、『実践ソーシャルスキルマニュアル』の中で、ソーシャルスキルは、「社会生活や対人関係を営んでいくために、必要とされる技能」と定義している。児童は、様々な人間関係の中で生活し、相手の立場に立って物事を考える力や自分の行動や感情をコントロールする力、必要に応じて行動のパターンを変えていく力などを育てていく。しかし、特別支援学級在籍の児童は、好ましい人間関係を築くことが苦手でソーシャルスキルが身に付いていないことが多い。また、通常の学級に在籍している児童の中にも、ソーシャルスキルが身に付いていないためにトラブルを起こす児童がいる。そこで、児童の生活をより豊かにするために、ソーシャルスキルを具体的に教えることがソーシャルスキルトレーニングである。この支援の手順は、「教示」「モデリン

グ」「リハーサル」「フィードバック」「般化」である。それぞれの方法については、表1に示すとおりである。

表1 ソーシャルスキルトレーニングの方法

手 順	方 法
教 示 ↓	直接、絵や手順表で視覚的に教え、「なぜそうしないといけないのか」「そうしたらどうなるのか」という理由や結果の見通しも、ていねいに教示する。
モデリング ↓	友達や先生の適切な振るまい方を見せるのと、問題場面を見せてどうすればよいかを考える方法がある。幼児や低学年は、適切な場面を見せる。
リハーサル ↓	ロールプレイングの手法を使って実際に練習してみる。特別な教育的支援の必要な児童の場合は、ゲームやワークシートで多層的にリハーサルを行う。
フィードバック ↓	児童の行動をほめたり、「〇〇するといいよ」と肯定的に修正を求めたりする。適切な行動が見られたときには、即時に評価する。そのとき、何についてほめたかを明示する。
般 化	実際の生活の場面でも実践できるようにする。特別な教育的支援の必要な児童の場合は、周囲に、その児童の特性を理解してもらうために、取り組んでいるスキルを保護者や先生に知らせる。

④ 通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングについて

通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングは、学級経営や生活指導の一環として展開することができる。具体的な場面でどう取り上げていくのかを次に述べる。

ア 授業

児童同士のディスカッション、グループによる体験学習や共同学習などのかかわり合いの展開に取り入れることができる。

イ 学級活動、朝の会、帰りの会

「教示」「モデリング」を朝の会で行い、児童は、それを意識しながら一日学級生活を送る。それが「リハーサル」にあたる。そして、帰りの会で「フィードバック」としての確認と認め合いの活動の中に、取り入れることができる。

ウ 係活動

役割をもって活動したことが、集団への所属感を高め、周囲の友達から適切に評価される認め合い活動につながる。お礼を言う言葉を教示し、お礼が言える児童の例を示す活動の中に取り入れることができる。

エ 清掃・給食

これらの当番活動は、すべての児童が順番に行うものなので、ソーシャルスキルを共有させるよい機会である。その中で、当番の人に必ず、「ありがとう」と声をかけるように説明しておき、活動が終わったら、誰にでも必ず認められるという経験を活動の中に取り入れることができる。

(2) 主題に迫るために

① 本校の特別な教育的支援の必要な児童の実態

特別支援学級在籍の児童は、特別支援学級では慣れている少人数の人間関係の中で生活している。特別支援学級在籍の児童は、通常の学級と一緒に活

動したいと思っている。しかし、特別支援学級の児童は、慣れていない場で友達とのかかわりを求められるので不安定になり、不適切と思われる行動をとることがある。そのため、交流学級の児童とかかわることに困難を示している。通常の学級に在籍している児童は、積極的に活動しようとする意欲的な面がある一方で、些細なことで口げんかをしたり友達とのかかわりが消極的になったりする面も見られる。そこで、通常の学級の担任に特別な教育的支援の必要な児童についての行動に関する調査表（「実践ソーシャルスキルマニュアル 上野一彦・岡田智編著」を参考に作成）を、記入してもらった。その結果、第1学年を除くどの学年にも、特別な教育的支援の必要な児童が在籍していることが分かった。

② 特別支援学級担任による支援

特別支援学級に在籍している児童は、自立活動等でソーシャルスキルを練習し交流及び共同学習に参加している。交流学級の児童と一緒に共通のスキルを学ぶことで、適切にかかわることができるようになり、児童同士が相手を理解するようになる。これによって、居心地のよい教室環境ができ、特別支援学級在籍の児童は、交流及び共同学習に

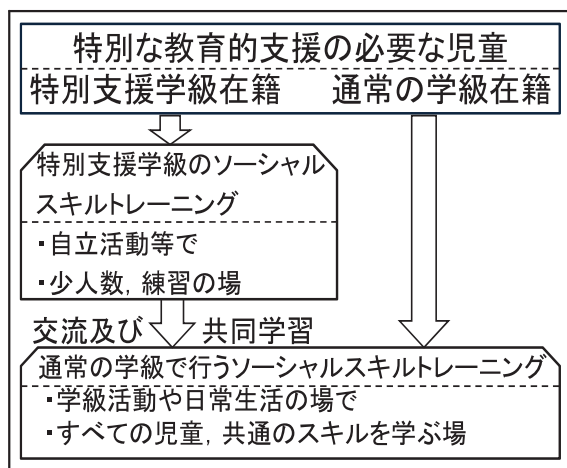


図1 特別支援学級担任による支援

取り組みやすくなる。また、通常の学級に在籍している特別な教育的支援の必要な児童と周囲の児童についても、共通のスキルを学ぶことによって、相手の行動や気持ちを理解するきっかけになると考える。

(3) 研究の実際

① 特別支援学級での実践

表2に示すように、特別支援学級在籍の児童は、個別に活動することを好み、相手の気持ちを理解することや仲間と協力して活動することに困難を示す。交流学級での交流及び共同学習を考慮して、仲間と一緒に活動するためのスキルを身につけさせたいと考え、仲間関係のソーシャルスキルトレーニング「新聞列車」を行った（図2）。

表2 行動に関する調査① (平成20. 5. 7実施, 特別支援学級担任による調査から)

児童	行動に関する調査表から	特別支援学級での様子	行動の目標
A	友達とのかかわりが難しいために、セルフコントロールやコミュニケーションのスキルが難しくなっている。	友達に声をかけられても応えることが少なく、授業中、一人でいることを好む。	無理のない程度で小集団活動に参加できる。
B	仲間関係のスキルが低く、特に仲間に加わることや、友達と協力して活動することが苦手である。	一人で学習するときには、静かに取り組むことができる。学級の仲間と協力することがが難しい。	友達と一緒に活動ができる。
C	セルフコントロールや集団行動でのスキルが低く、自分の気持ちを強く表し、集団の中で活動することが苦手である。	下級生の面倒はよく見る。休み時間でも、学級の児童とのみの、交流を好む。	交流学級の児童と遊ぶことができる。

(*行動に関する調査表は、「実践ソーシャルスキルマニュアル上野一彦・岡田智編著」を参考に作成したもの 以下表3, 表4も同様)

A児は、乗り物への関心が高いことから活動に参加できた。B児は、はじめは3人での活動に遠慮気味だったが、慣れてくると大きな声を出しながら活動した。C児は、A児とのみかかわることが多かったが、B児と動きを合わせて活動することによって、B児のよい面に気付くことができた。「協力のコツ」を具体的に示し、かけ声をかける練習をしたことで、児童が楽しみながら一緒に活動する姿が見られた。B児は、「まあまあだった」の意の感想を書いていることから、3人で活動することのよさに気付いたことがわかる。

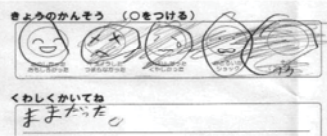
活動		支援と配慮	結果
導入 ↓ モデリング ↓ リハーサル ↓ フィードバック	1 テーマについての説明を聞く。	活動に興味をもたせるよう、新聞を使って楽しく活動したことを振り返らせる。	新聞を使って何をするのかと質問し、ゲームへの関心を高めることができた。
	2 かけ声をかけて、ゲームをする場面を示す。	相手の動きをよく見ると、動きを合わせられることを実際に示す。	かかわりが難しかった児童同士が、一緒に活動することができた。
	3 「仲間と動きを合わせよう“新聞列車”」を行う。	「協力のコツ」を示し、かけ声かけられるように一緒に練習する。	「1, 2, 1, 2」とかけ声をかけることで、動きを合わせることができた。
	4 感想を記入し、協力ふりかえり表の書きかたを知る。	「仲間と協力したから、ゴールできたんだね。」と、具体的にほめ成功体験を積むよう配慮する。	相手の動きに気付くことができた。
		言葉で書くより、5つの表情から選べるようにし、気持ちを表現しやすいように配慮した。	「まあまあだった」の意の感想を、書くことができた。 

図2 特別支援学級での実践「仲間と動きを合わせよう“新聞列車”」

② 特別支援学級在籍の児童が交流及び共同学習をする学級での実践

B児は、特別支援学級でソーシャルスキルを学び、通常の学級で適切にかかわろうとするが、通常の学級にも特別な教育的支援の必要な児童（D児）が在籍しているので、交流及び共同学習に参加することが難しいことがある。そこで、表3に示す児童の実態をもとに、学級活動の「友達になろう」の題材の中で、仲間関係のソーシャルスキルトレーニングを行った。特別な教育的支援の必要な児童に対して、特別支援教育の視点から聴覚や視覚に訴える支援や個に応じた具体的な言葉かけや手だて等を積極的に取り入れ、通常の学級の担任とティーム・ティーチングの授業形態で実践した。

表3 行動に関する調査② (平成20.5.7実施、通常の学級の担任による調査から)

児童	行動に関する調査表から	学級での様子	行動の目標
B (特別支援学級在籍)	仲間関係のスキルが低く、特に仲間に加わることや友達と協力して活動することが苦手である。	交流学級で学習活動に参加しようとするが、仲間に入っていくことが難しい。友達とのかかわりが消極的である。	交流学习で、友達と一緒に活動ができる。
D	集団行動とセルフコントロールに困難を示す。特に静かに話を聞くことや活動に入る前に考えること苦手である。	思い通りにならないことがあると、感情を強く表すことがあり、友達とトラブルを起こすことがある。	感情をコントロールして、学習活動ができる。

★1～★7の印の太字の文は、特別支援教育の視点からの支援事項

児童の活動		教師の働きかけ等	
導入	1 友達と協力することについて前時までの活動を振り返る。	特別支援学級担任	通常の学級の担任
		全体 ・前時までの活動で、協力で	個別 ・B児がふり返り表について
	2 本時の課題について理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">グループを作り、協力してゲームをしよう。</div>	全体 ・動物の名前を言いその音数の人数で集まることを伝える。 ・児童に「あいさつの例」を示し、みんなであいさつの仕方を練習するよう支援する。 ・ 児童数が24人なので、約数の音数の動物名で、グループ作りができるよう配慮したい。 ★2 ・ 動物名に関しては、B児の興味のある「クロコダイル」を取り上げ、活動の意欲付けとしたい。 ★3 ・ 動物の名前に合わせて太鼓をたたき、聴覚的にとらえられるようにしたい。 ★1	個別 ・ 視覚的にとらえられるように動物名のカードを示す。 ★1 ・「あいさつの例」を掲示する。 ・B児がグループに入れないでいるときは、付き添って一緒に参加する。 ・D児がグループを作れないでいるときは、声をかけてくれそうな友達の近くに、意図的に移動するように促す。 ・グループに入れず戸惑っている児童には、仲間に入れるように誘導する。 ・ あいさつをするのが難しいグループには、「あいさつの例」を示し、一緒にあいさつする。 ★4 ・ B児には、前回動きを合わせて上手にできたことを話し、ゲームへの意欲を高めたい。 ★5 ・D児がグループのメンバーにこだわっているときは、上手にあいさつができたことをほめ、4人で協力することへの意欲を持たせたい。
	3 グループ作りをする。 ・あいさつの練習をする。 ・動物の名前を聞いて、その音数でグループを作る。 ・集まったら、まずあいさつする。 「ウサギ」 ．．．→3人のグループ 「クロコダイル」 ．．．→6人のグループ 「シマウマ」 →4人のグループ	・4人が協力することが大切であることを助言したい。	
モデリングとりハール	4 ゲーム「まほうのじゅうたん」に取り組む。 ・ルールの説明を聞く。 ・4人のグループでゲームを行う。 ・ビニールシートに4人が乗る。 ・2人目以降の児童は前の児童の肩に手をあてる。 ・かけ声をかけながら跳ぶようにして前に進む。	全体 ・ゲームの仕方について、不適切な場面の例をT2と示し、何がいけなかったか、どうすればよかったか考えさせたい。 ・児童の意見を取り入れながらかけ声をかけることと、動きを合わせることを示したい。 ・ゲームの仕方について、適切な場面の例をT2と示し、ゲームに生かしたい。	全体 ・ゲームの仕方について不適切な場面の例をT1と示す。 ・児童の意見を黒板に書き、考えを深めさせたい。 ・「協力のコツ」の掲示シートを貼って示す。 ・適切な場面の例をT1と示し、ゲームに生かしたい。
	5 今日のゲームを振り返る。	個別 ・言葉かけが上手なチームに対し言葉かけを、みんなに示すよう促す。	全体 ・言葉かけがよかったチームを賞賛し、どこがよかったかを全体で考えるよう促したい。
フイードバック	6 本時の学習活動を振り返りながら、仲間と協力することとあたたかい言葉かけについて、感想をワークシートにまとめる。	・あたたかい言葉かけをした児童に対して、みんなの前で発表するように促す。 ・「協力」と「あたたかい言葉かけ」の意識が活動に現れていた具体的な場面を評価して、学級外の生活にも生かそうとする意欲を持たせたい。さらに、B児が友達と協力して楽しく活動していたことに触れ、友達となかよくするよさについてもう一度考えるように促す。	・今日の活動の感想を言い、今後の友達作りにおいて、協力することとあたたかい言葉かけの大切さを考えさせたい。 ・ 仲間と協力したりあたたかい言葉かけをしたりして頑張った気持ちをワークシートの絵に表情で表し、感想をまとめることを伝える。 ★6
	7 「友達のやさしさ発見カード」の記入の仕方を聞く。	・「友達のやさしさ発見カード」を配り、T2の話聞くように促す。	・ 今後、あたたかい言葉をかけてもらったときには、「友達のやさしさ発見カード」を書いて掲示することを伝え、ソーシャルスキルを日常生活に生かすよう支援したい。 ★7

図3 第3学年での実践「仲間と動きを合わせよう“まほうのじゅうたん”」

支援と配慮	結果
<p>★1 グループ作りでは、音数を示すのに視覚と聴覚の両方でとらえることができるよう配慮した。</p> 	<p>動物名をカード（視覚）と太鼓の音（聴覚）の両方で示すことにより、誰もがグループ作りの人数を素早く把握でき、活動に取り組みやすくなった。</p> <p>視覚と聴覚の指示により誰もが理解できた</p>
<p>★2 グループ作りの人数は、割り切れる数にしてB児が必ずグループ作りに参加できるように配慮した。</p>	<p>自分からグループに入れず、体育館の隅に行ってしまったが、友達が呼んでくれたので活動に参加することができた。</p> <p>児童の呼びかけにより参加できた</p>
<p>★3 グループ作りの動物名は、B児が特別支援学級で紙粘土のクロコダイルを作ったことを考慮し、参加への意欲につなげた。</p>	<p>B児は、クロコダイルの言葉を聞いて、「クロコダイル作ったよ。」と友達に話しながら、スムーズにグループ作りに参加するこ</p> 
<p>★4 グループができ、チームで協力するためにかけ声をかけるよう示すとき、「あいさつの例」を提示しかけ声で迷わないよう配慮した。</p> 	<p>「あいさつの例」を提示したので、誰もが迷わずかけ声をかけることができた。</p> <p>チームでなかよくあいさつができた</p>
<p>★5 B児のチームになった児童が、B児の動きを心配をしていたので、以前に練習したことを話し、安心してB児を受け入れるように配慮した。</p>	<p>B児は前回上手にできたことを思い出し、動きを合わせようとした。また、同じチームの児童は、安心してB児を受け入れたので協力して活動することができた。</p>
<p>★6 感想シートは図のように言葉と表情がかけるものを用意し、言葉で表現することが苦手な児童へも気持ちを表すことができるようにした。</p> 	<p>児童は、まず表情を描き込みながら活動を振り返ることができた。描いた表情をもとにして感想を言葉で表していた。</p>  <p>気持ちの表現ができた</p>
<p>★7 「やさしさ発見カード」を示し、記入していくことを伝え、協力することと言葉かけの日常化の手立てとした。</p> 	<p>児童の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> みんなで協力できてうれしかった。号れいも言うてうまくいった。 みんなで、リズムとったり声をかけたりしてチームわーくあわせた。 友達ときょう力できてうれしかったです。 <p>通常の学級の担任は、「やさしさ発見カード」のコーナーを作った。児童は、「協力ふりかえり表」の記入で、言葉かけや協力することを考えながら、学校生活を送るようになった。</p> <p>日常生活に生かすことができた</p>

図3 特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲の児童への支援

③ 特別な教育的支援の必要な児童が在籍する学級での実践

表4 行動に関する調査 ③ (平成20. 5. 7実施, 通常の学級担任による調査から)




児童	行動に関する調査表から	学級での様子	行動の目標
E	集団行動とコミュニケーションの評価が低く, 学級集団での活動が苦手である。	感情と逆の表現をし, 言葉遣いが乱暴になるため友達とトラブルを起こすことがある。友達とのかかわりが難しい。	適切な言葉遣いで, 友達とかかわることができる。

表4で示すE児の実態から, 学級活動「友達になろう」の題材の中に, 仲間関係のソーシャルスキルトレーニング「あったか・チクチク言葉」を取り入れた(図4)。授業後の児童の感想から, 表5で示すような変容が見られた。

活動	支援と配慮	結果
モデリング ↓ 教示	1 サッカーの場面のやりとりを見る。 2 あったか・チクチク言葉の意味を考える。	児童は, 教師のチクチク言葉に驚き, 相手に嫌な感情を与えることに気付いた。
↓	3 ワークシートであったか・チクチク言葉を分ける。	あったか・チクチク言葉を実際に分類することで, どういう言葉かを理解していた。うなずきながら言葉かけについて振り返る様子が見られた。
リハーサル ↓ フィードバック	4 「あったか・チクチクゲーム」をする。 5 「やさしさ発見カード」の発見カードの発明を聞く。	あったか言葉をかけたりかけられたりの体験から, 言葉が人に与える影響を実感できた。 日常生活の中で, 意識してあったか言葉を使い, チクチク言葉を抑える様子が見られた。

図4 第4学年での実践「あったか・チクチク言葉」

表5 児童の感想と変容

にこにこ顔 23人	納得顔6人	E児の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・てっだっでもらったり, ころんだときに, ありがとうやだいじょうぶを, たくさんの人に言いたくなりました。やってもらったら, ありがとうを忘れない! ・私は, ときどきチクチク言葉を言ってしまう。でも, あったか言葉も言います。今日, 体育のとき, 「ごめんね。」と言ったばかりです。今度は, なるべくあったか言葉を言いたいです。 ・あったか言葉のことをやさしい言葉としました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なかまをたいせつにすることが, わかりました。 ・私は, たまにチクチク言葉を言ってしまう。でも, 今日みたいなきっかけで, チクチク言葉はもう言いません。 ・知らないあいだにひどいことをしていました。 	<p>[感想が無記入のため様子の記録]</p>  <p>あったか言葉は, 「ばーか」と言っていたが, 終末に「サンキュー」が言えた。表情は, 最初, つり上げた目を描いたが, 自分から丸い目に描き直した。</p>

(4) 研究の成果

① 児童の変容

ア 特別支援学級在籍の児童は、特別支援学級で事前にソーシャルスキルトレーニングを行ったので、交流及び共同学習に、見通しをもち安心して参加することができた。それによって、自ら友達とかかわろうとする姿が見られた。また、交流及び共同学習のときに、学級全体で言葉かけや相手に意識を向けて動きを合わせるコツを具体的に体験したことで、周囲の児童も自然に特別支援学級在籍の児童を理解するきっかけとなった。さらに、通常の学級の児童が「やさしさ発見カード」を活用することによって、協力することやあたたかい言葉かけをしようとする意識が少しずつ見られるようになってきた。その結果、特別支援学級在籍の児童が溶け込める場面ができた。

イ 通常の学級に在籍している特別な教育的支援の必要な児童の実態をもとに、学級全体でソーシャルスキルトレーニングを行った。活動の導入段階では、本人から不適切な言葉が出ていたが、終末に感想をかく場面で、友達からアドバイスをもらったとき、自然に「サンキュー」という言葉が出ていた。このことから、適切な言葉遣いで友達とかかわろうとする気持ちが見え始めた。また、図5に示すように、周囲の児童もあたたかい言葉のよさを感じ、仲間を大切にすることに気付くことができた。そして、E児に「サンキュー」と言われた児童は、これまでのE児とは違ったよい面を知ることができた。

表6 通常の学級で行うソーシャルスキルトレーニングについて

(平成20. 5. 30実施, 本校職員)

授業について <ul style="list-style-type: none">・挨拶などは、理屈でわかっても行動できないことが多いので動作化や声を出すトレーニングをくり返し行い、習慣化させていくのが効果的であることを実感した。・(日常生活で) 普段意識しないで使っていることばですが、相手に嫌な思いをさせたり、あたたかい気持ちにさせたりすることを、あらためて私自身感じることができました。子どもたちも感じ取れた様に思います。
児童同士のかかわりについて <ul style="list-style-type: none">・ゲームをしながら、友達とのかかわりについて大切なことを学べるよい授業だなと感じました。・相手を思いやる言葉をかけるなど、児童同士のかかわりが少しずつですが、円滑になったように感じられました。・協力することやあたたかい言葉かけをしようとする意識がほんの少しだけ見られるようになってきた。
先生と児童のかかわりについて <ul style="list-style-type: none">・継続的に日常化を図って行くことが大切であると思った。担任は、小さな変容を見逃さないことも大切。・「教える」ということで、児童への目線が上から下へとなりがちでしたが、ソーシャルスキルを通して、あらためて児童の目の高さになって物事を見たり考えたりすることを、学び直したように感じます。・児童のよい「ささやき」に耳を傾けるようになった。(ほめるために)

② 通常の学級の担任の意識の変容

ソーシャルスキルトレーニングを授業や学校生活の場面に取り入れたいか

というアンケートでは、回答をした全員の先生が取り入れたいと答えた。通常の学級の担任は、特別支援学級担任が行うソーシャルスキルトレーニングの実践を参観したり、ティーム・ティーチングを行ったりして、特別な教育的支援の必要な児童への具体的な支援の方法の一つを、理解することができた（表6）。また、特別支援学級在籍の児童が交流及び共同学習をするとき、学級全体の児童を指導しながらその児童を個別に支援する場面で、誰にでも分かりやすい支援の在り方を考えることができた。

4 研究のまとめ

- (1) 特別支援学級在籍の児童が、交流学級で友達とかかわるために必要なソーシャルスキルトレーニングを行うことで、安心感をもって交流及び共同学習に参加することができた。
- (2) 通常の学級の中で、特別な教育的支援の必要な児童が、ソーシャルスキルトレーニングを行うことで、周囲の児童に適切にかかわろうとする姿が見られた。また、周囲の児童は、特別な教育的支援の必要な児童とのかかわり方を自然に身に付けることができた。
- (3) 通常の学級の担任は、特別な教育的支援の必要な児童の特性をとらえ、その児童と周囲の児童が、安心して集団生活に溶け込んでいけるような、居心地のよい学級環境を作るために、特別支援教育の視点からの支援の方法を知るきっかけとなった。

5 今後の課題

- (1) 特別支援学級在籍の児童が、無理なく交流及び共同学習を行うことができるように、特別支援学級担任として児童の特性の理解に努め、児童がもっているよさを伸ばし、児童にあった支援の在り方を研究していきたい。
- (2) 特別な教育的支援が必要な児童が、通常の学級で好ましい集団生活を送れるように、特別支援学級担任として、通常の学級の担任と連携を図り、効果的な支援の在り方を提案していきたい。
- (3) 特別な教育的支援の必要な児童への支援の在り方について、教職員全員で話し合う機会を定期的に設けたい。そして、特別支援学級在籍の児童と周囲の児童が安心感をもって学校生活を送れるような、校内支援体制を構築したい。

〈主な参考文献〉

- 上野一彦・岡田智編著「実践ソーシャルスキルマニュアル」明治図書，平成19年7月
- 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著「学級ソーシャルスキル小学校低学年」図書文化，平成19年6月
- 小貫悟・名越斉子・三和彩著「LD・ADHDへのソーシャルスキルトレーニング」日本文化科学社，平成17年4月